

# 消費者契約法の一部を改正する法律 (平成28年法律第61号)

消費者と事業者との間の情報・交渉力の格差に鑑み、**契約の取消し**と**契約条項の無効等**を規定

## 1. 契約の取消し

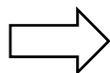
### <現行規定>

事業者の以下の行為により契約を締結した場合、消費者は取消しが可能

- ① 不実告知 (重要事項 [=契約の目的物に関する事項] が対象)
- ② 断定的判断の提供
- ③ 不利益事実の不告知
- ④ 不退去/退去妨害

### <課題>

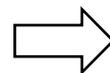
高齢者の判断能力の低下等につけ込んで、大量に商品を購入させる被害事案



### <改正内容>

**過量な内容の契約の取消し**  
(新たな取消事由)

契約の目的物に関する不実告知による被害事案 (例: 床下にシロアリがあり、家が倒壊)



**重要事項の範囲の拡大**

取消権の行使期間を経過した被害事案



**行使期間の伸長**  
(短期を6か月→1年に伸長)

○ このほか、取消しの効果についても規定

○このほか、消費者団体訴訟制度 (差止請求) に関する規定が置かれている

## 2. 契約条項の無効

### <現行規定>

消費者の利益を不当に害する条項は、無効

- ① 事業者の損害賠償責任を免除する条項
- ② 消費者の支払う損害賠償額の予定条項
- ③ 消費者の利益を一方的に害する条項 (「一般条項」)



【10条】①民法、商法等の任意規定の適用による場合と比べ消費者の権利を制限する条項であって、②信義則に反して消費者の利益を害するものは無効

### <課題>

消費者の解除権を一切、認めない条項の存在 (→欠陥製品であっても残金を支払い続ける) (例: 「いかなる場合でも解除できません」)



### <改正内容>

事業者の**債務不履行等の場合でも、消費者の解除権を放棄させる条項** (無効とする条項の追加)

法10条の①は明文の規定だけではなく、一般的な法理等も含むとする最高裁の判決



**法10条に例示を追加** (※)

(※) 消費者の不作为をもって意思表示をしたものとみなす条項

○ このほか、「民法の規定による」という文言を削除

○施行期日は、公布日から起算して1年を経過した日 (平成29年6月3日)

目次

○消費者契約法（平成十二年法律第六十一号）（本則関係）	1
○民法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成二十八年法律第六十一号）（附則第六条関係）	8

改正後	改正前
<p>（目的）</p> <p>第一条 この法律は、消費者と事業者との間の情報の質及び量並びに交渉力の格差に鑑み、事業者の一定の行為により消費者が誤認し、又は困惑した場合等について契約の申込み又はその承諾の意思表示を取り消すことができることとともに、事業者の損害賠償の責任を免除する条項その他の消費者の利益を不当に害することとなる条項の全部又は一部を無効とするほか、消費者の被害の発生又は拡大を防止するため適格消費者団体が事業者等に対し差止請求をすることができることとするにより、消費者の利益の擁護を図り、もって国民生活の安定向上と国民経済の健全な発展に寄与することを目的とする。</p> <p>（消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示の取消し）</p> <p>第四条 （略）</p> <p>2・3 （略）</p> <p>4  消費者は、事業者が消費者契約の締結について勧誘をするに際し、物品、権利、役務その他の当該消費者契約の目的となるものの分量、回数又は期間（以下この項において「分量等」という。）が当</p>	<p>（目的）</p> <p>第一条 この法律は、消費者と事業者との間の情報の質及び量並びに交渉力の格差にかんがみ、事業者の一定の行為により消費者が誤認し、又は困惑した場合等について契約の申込み又はその承諾の意思表示を取り消すことができることとともに、事業者の損害賠償の責任を免除する条項その他の消費者の利益を不当に害することとなる条項の全部又は一部を無効とするほか、消費者の被害の発生又は拡大を防止するため適格消費者団体が事業者等に対し差止請求をすることができることとするにより、消費者の利益の擁護を図り、もって国民生活の安定向上と国民経済の健全な発展に寄与することを目的とする。</p> <p>（消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示の取消し）</p> <p>第四条 （略）</p> <p>2・3 （略）</p> <p>（新設）</p>

該消費者にとつての通常の分量等（消費者契約の目的となるもの  
内容及び取引条件並びに事業者がその締結について勧誘をする際の  
消費者の生活の状況及びこれについての当該消費者の認識に照らし  
て当該消費者契約の目的となるものの分量等として通常想定される  
分量等をいう。以下この項において同じ。）を著しく超えるもので  
あることを知っていた場合において、その勧誘により当該消費者契  
約の申込み又はその承諾の意思表示をしたときは、これを取り消す  
ことができる。事業者が消費者契約の締結について勧誘をするに際  
し、消費者が既に当該消費者契約の目的となるものと同種のものを  
目的とする消費者契約（以下この項において「同種契約」という。  
）を締結し、当該同種契約の目的となるものの分量等と当該消費者  
契約の目的となるものの分量等とを合算した分量等が当該消費者に  
とつての通常の分量等を著しく超えるものであることを知っていた  
場合において、その勧誘により当該消費者契約の申込み又はその承  
諾の意思表示をしたときも、同様とする。

5| 第一項第一号及び第二項の「重要事項」とは、消費者契約に係る  
次に掲げる事項（同項の場合にあつては、第三号に掲げるものを除  
く。）をいう。

一 物品、権利、役務その他の当該消費者契約の目的となるもの  
質、用途その他の内容であつて、消費者の当該消費者契約を締結  
するか否かについての判断に通常影響を及ぼすべきもの

二 物品、権利、役務その他の当該消費者契約の目的となるもの  
対価その他の取引条件であつて、消費者の当該消費者契約を締結

4| 第一項第一号及び第二項の「重要事項」とは、消費者契約に係る  
次に掲げる事項であつて消費者の当該消費者契約を締結するか否か  
についての判断に通常影響を及ぼすべきものをいう。

一 物品、権利、役務その他の当該消費者契約の目的となるもの  
質、用途その他の内容

二 物品、権利、役務その他の当該消費者契約の目的となるもの  
対価その他の取引条件

するか否かについての判断に通常影響を及ぼすべきもの

三 前二号に掲げるもののほか、物品、権利、役務その他の当該消費者契約の目的となるものが当該消費者の生命、身体、財産その他の重要な利益についての損害又は危険を回避するために通常必要であると判断される事情

6| 第一項から第四項までの規定による消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示の取消しは、これをもって善意の第三者に対抗することができない。

(媒介の委託を受けた第三者及び代理人)

第五条 前条の規定は、事業者が第三者に対し、当該事業者と消費者との間における消費者契約の締結について媒介をすることの委託（以下この項において単に「委託」という。）をし、当該委託を受けた第三者（その第三者から委託（二以上の段階にわたる委託を含む。）を受けた者を含む。以下「受託者等」という。）が消費者に対して同条第一項から第四項までに規定する行為をした場合について準用する。この場合において、同条第二項ただし書中「当該事業者」とあるのは、「当該事業者又は次条第一項に規定する受託者等」と読み替えるものとする。

2 消費者契約の締結に係る消費者の代理人（復代理人（二以上の段階にわたり復代理人として選任された者を含む。）を含む。以下同じ。）、事業者の代理人及び受託者等の代理人は、前条第一項から第四項まで（前項において準用する場合を含む。次条から第七条ま

(新設)

5| 第一項から第三項までの規定による消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示の取消しは、これをもって善意の第三者に対抗することができない。

(媒介の委託を受けた第三者及び代理人)

第五条 前条の規定は、事業者が第三者に対し、当該事業者と消費者との間における消費者契約の締結について媒介をすることの委託（以下この項において単に「委託」という。）をし、当該委託を受けた第三者（その第三者から委託（二以上の段階にわたる委託を含む。）を受けた者を含む。以下「受託者等」という。）が消費者に対して同条第一項から第三項までに規定する行為をした場合について準用する。この場合において、同条第二項ただし書中「当該事業者」とあるのは、「当該事業者又は次条第一項に規定する受託者等」と読み替えるものとする。

2 消費者契約の締結に係る消費者の代理人（復代理人（二以上の段階にわたり復代理人として選任された者を含む。）を含む。以下同じ。）、事業者の代理人及び受託者等の代理人は、前条第一項から第三項まで（前項において準用する場合を含む。次条及び第七条に

でにおいて同じ。)の規定の適用については、それぞれ消費者、事業者及び受託者等とみなす。

(解釈規定)

第六条 第四条第一項から第四項までの規定は、これらの項に規定する消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示に対する民法(明治二十九年法律第八十九号)第九十六条の規定の適用を妨げるものと解してはならない。

(取消権を行使した消費者の返還義務)

第六条の二 民法第二百二十一条の二第一項の規定にかかわらず、消費者契約に基づく債務の履行として給付を受けた消費者は、第四条第一項から第四項までの規定により当該消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示を取り消した場合において、給付を受けた当時その意思表示が取り消すことができるものであることを知らなかったときは、当該消費者契約によって現に利益を受けている限度において、返還の義務を負う。

(取消権の行使期間等)

第七条 第四条第一項から第四項までの規定による取消権は、追認をすることができる時から一年間行わないときは、時効によって消滅する。当該消費者契約の締結の時から五年を経過したときも、同様とする。

において同じ。)の規定の適用については、それぞれ消費者、事業者及び受託者等とみなす。

(解釈規定)

第六条 第四条第一項から第三項までの規定は、これらの項に規定する消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示に対する民法(明治二十九年法律第八十九号)第九十六条の規定の適用を妨げるものと解してはならない。

(新設)

(取消権の行使期間等)

第七条 第四条第一項から第三項までの規定による取消権は、追認をすることができる時から六箇月間行わないときは、時効によって消滅する。当該消費者契約の締結の時から五年を経過したときも、同様とする。

2 会社法（平成十七年法律第八十六号）その他の法律により詐欺又は強迫を理由として取消しをすることができないものとされている株式若しくは出資の引受け又は基金の拠出が消費者契約としてされた場合には、当該株式若しくは出資の引受け又は基金の拠出に係る意思表示については、第四条第一項から第四項までの規定によりその取消しをすることができない。

（事業者の損害賠償の責任を免除する条項の無効）

第八条 次に掲げる消費者契約の条項は、無効とする。

一・二 （略）

三 消費者契約における事業者の債務の履行に際してされた当該事業者の不法行為により消費者に生じた損害を賠償する責任の全部を免除する条項

四 消費者契約における事業者の債務の履行に際してされた当該事業者の不法行為（当該事業者、その代表者又はその使用する者の故意又は重大な過失によるものに限る。）により消費者に生じた損害を賠償する責任の一部を免除する条項

五 （略）

2 （略）

（消費者の解除権を放棄させる条項の無効）

第八条の二 次に掲げる消費者契約の条項は、無効とする。

2 会社法（平成十七年法律第八十六号）その他の法律により詐欺又は強迫を理由として取消しをすることができないものとされている株式若しくは出資の引受け又は基金の拠出が消費者契約としてされた場合には、当該株式若しくは出資の引受け又は基金の拠出に係る意思表示については、第四条第一項から第三項まで（第五条第一項において準用する場合を含む。）の規定によりその取消しをすることができない。

（事業者の損害賠償の責任を免除する条項の無効）

第八条 次に掲げる消費者契約の条項は、無効とする。

一・二 （略）

三 消費者契約における事業者の債務の履行に際してされた当該事業者の不法行為により消費者に生じた損害を賠償する民法の規定による責任の全部を免除する条項

四 消費者契約における事業者の債務の履行に際してされた当該事業者の不法行為（当該事業者、その代表者又はその使用する者の故意又は重大な過失によるものに限る。）により消費者に生じた損害を賠償する民法の規定による責任の一部を免除する条項

五 （略）

2 （略）

（新設）

一 事業者の債務不履行により生じた消費者の解除権を放棄させる  
条項

二 消費者契約が有償契約である場合において、当該消費者契約の  
目的物に隠れた瑕疵があること（当該消費者契約が請負契約であ  
る場合には、当該消費者契約の仕事の目的物に瑕疵があること）  
により生じた消費者の解除権を放棄させる条項

（消費者の利益を一方的に害する条項の無効）

第十条 消費者の不作為をもって当該消費者が新たな消費者契約の申  
込み又はその承諾の意思表示をしたものとみなす条項その他の法令  
中の公の秩序に關しない規定の適用による場合に比して消費者の権  
利を制限し又は消費者の義務を加重する消費者契約の条項であつて  
、民法第一条第二項に規定する基本原則に反して消費者の利益を一  
方的に害するものは、無効とする。

（他の法律の適用）

第十一条 消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示の取消し及び  
消費者契約の条項の効力については、この法律の規定によるほか、  
民法及び商法（明治三十二年法律第四十八号）の規定による。

2  
（略）

（差止請求権）

第十二条 適格消費者団体は、事業者、受託者等又は事業者の代理人

（消費者の利益を一方的に害する条項の無効）

第十条 民法、商法（明治三十二年法律第四十八号）その他の法律の  
公の秩序に關しない規定の適用による場合に比し、消費者の権利を  
制限し、又は消費者の義務を加重する消費者契約の条項であつて、  
民法第一条第二項に規定する基本原則に反して消費者の利益を一方  
的に害するものは、無効とする。

（他の法律の適用）

第十一条 消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示の取消し及び  
消費者契約の条項の効力については、この法律の規定によるほか、  
民法及び商法の規定による。

2  
（略）

（差止請求権）

第十二条 適格消費者団体は、事業者、受託者等又は事業者の代理人

若しくは受託者等の代理人（以下「事業者等」と総称する。）が、消費者契約の締結について勧誘をするに際し、不特定かつ多数の消費者に対して第四条第一項から第四項までに規定する行為（同条第二項に規定する行為にあつては、同項ただし書の場合に該当するものを除く。次項において同じ。）を現に行い又は行うおそれがあるときは、その事業者等に対し、当該行為の停止若しくは予防又は当該行為に供した物の廃棄若しくは除去その他の当該行為の停止若しくは予防に必要な措置をとることを請求することができる。ただし、民法及び商法以外の他の法律の規定によれば当該行為を理由として当該消費者契約を取り消すことができないときは、この限りでない。

2 適格消費者団体は、次の各号に掲げる者が、消費者契約の締結について勧誘をするに際し、不特定かつ多数の消費者に対して第四条第一項から第四項までに規定する行為を現に行い又は行うおそれがあるときは、当該各号に定める者に対し、当該各号に掲げる者に対する是正の指示又は教唆の停止その他の当該行為の停止又は予防に必要な措置をとることを請求することができる。この場合においては、前項ただし書の規定を準用する。

一・二 (略)

3・4 (略)

若しくは受託者等の代理人（以下「事業者等」と総称する。）が、消費者契約の締結について勧誘をするに際し、不特定かつ多数の消費者に対して第四条第一項から第三項までに規定する行為（同条第二項に規定する行為にあつては、同項ただし書の場合に該当するものを除く。次項において同じ。）を現に行い又は行うおそれがあるときは、その事業者等に対し、当該行為の停止若しくは予防又は当該行為に供した物の廃棄若しくは除去その他の当該行為の停止若しくは予防に必要な措置をとることを請求することができる。ただし、民法及び商法以外の他の法律の規定によれば当該行為を理由として当該消費者契約を取り消すことができないときは、この限りでない。

2 適格消費者団体は、次の各号に掲げる者が、消費者契約の締結について勧誘をするに際し、不特定かつ多数の消費者に対して第四条第一項から第三項までに規定する行為を現に行い又は行うおそれがあるときは、当該各号に定める者に対し、当該各号に掲げる者に対する是正の指示又は教唆の停止その他の当該行為の停止又は予防に必要な措置をとることを請求することができる。この場合においては、前項ただし書の規定を準用する。

一・二 (略)

3・4 (略)

○民法の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成二十八年法律第 号）（附則第六条関係）

（傍線部分は改正部分）

改正後	改正前
<p>（消費者契約法の一部改正）</p> <p>第九十八条 消費者契約法（平成十二年法律第六十一号）の一部を次のように改正する。</p> <p>第四条第六項中「善意の」を「善意でかつ過失がない」に改める。</p> <p>第八条第一項第五号を削り、同条第二項中「前項第五号」を「前項第一号又は第二号」に改め、「条項」の下に「のうち、消費者契約が有償契約である場合において、引き渡された目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないとき（当該消費者契約が請負契約である場合には、請負人が種類又は品質に関して契約の内容に適合しない仕事の場合には、仕事を終了した時に仕事の内容が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないとき。）」。以下この項において同じ。）に、これにより消費者に生じた損害を賠償する事業者の責任を免除するもの」を加え、同項第一号中「当該消費者契約の目的物に隠れた瑕疵がある」を「引き渡された目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しない」に、「瑕疵のない物をもってこれに代える責任又は当該瑕疵を修補する」を「履行の追完をする責任又は不適合の程度に応じた代金若しくは報酬の減額をする」に改め</p>	<p>（消費者契約法の一部改正）</p> <p>第九十八条 消費者契約法（平成十二年法律第六十一号）の一部を次のように改正する。</p> <p>第四条第五項中「善意の」を「善意でかつ過失がない」に改める。</p> <p>第八条第一項第五号を削り、同条第二項中「前項第五号」を「前項第一号又は第二号」に改め、「条項」の下に「のうち、消費者契約が有償契約である場合において、引き渡された目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないとき（当該消費者契約が請負契約である場合には、請負人が種類又は品質に関して契約の内容に適合しない仕事の場合には、仕事を終了した時に仕事の内容が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないとき。）」。以下この項において同じ。）に、これにより消費者に生じた損害を賠償する事業者の責任を免除するもの」を加え、同項第一号中「当該消費者契約の目的物に隠れた瑕疵がある」を「引き渡された目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しない」に、「瑕疵のない物をもってこれに代える責任又は当該瑕疵を修補する」を「履行の追完をする責任又は不適合の程度に応じた代金若しくは報酬の減額をする」に改め</p>

、同項第二号中「当該消費者契約の目的物に隠れた瑕疵がある」を「引き渡された目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しない」に、「当該瑕疵」を「その目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないこと」に、「瑕疵のない物をもってこれに代える責任を負い、又は当該瑕疵を修補する」を「又は履行の追完をする」に改める。

第八条の二を次のように改める。

(消費者の解除権を放棄させる条項の無効)

第八条の二 事業者の債務不履行により生じた消費者の解除権を放棄させる消費者契約の条項は、無効とする。

第十二条第三項中「第八条第一項第五号」を「第八条第一項第一号又は第二号」に、「同条第二項各号に掲げる場合」を「同条第二項の場合」に改める。

(消費者契約法の一部改正に伴う経過措置)

第九十九条 施行日前にされた意思表示については、前条の規定による改正後の消費者契約法（以下この条において「新消費者契約法」という。）第四条第六項（新消費者契約法第五条第一項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に締結された消費者契約（前条の規定による改正前の消費者契約法第二条第三項に規定する消費者契約をいう。）の条項については、新消費者契約法第八条、第八条の二及び第十二条第三項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

、同項第二号中「当該消費者契約の目的物に隠れた瑕疵がある」を「引き渡された目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しない」に、「当該瑕疵」を「その目的物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないこと」に、「瑕疵のない物をもってこれに代える責任を負い、又は当該瑕疵を修補する」を「又は履行の追完をする」に改める。

第十二条第三項中「第八条第一項第五号」を「第八条第一項第一号又は第二号」に、「同条第二項各号に掲げる場合」を「同条第二項の場合」に改める。

(消費者契約法の一部改正に伴う経過措置)

第九十九条 施行日前にされた意思表示については、前条の規定による改正後の消費者契約法（以下この条において「新消費者契約法」という。）第五条第五項（新消費者契約法第五条第一項において準用する場合を含む。）の規定にかかわらず、なお従前の例による。

2 施行日前に締結された消費者契約（前条の規定による改正前の消費者契約法第二条第三項に規定する消費者契約をいう。）の条項については、新消費者契約法第八条及び第十二条第三項の規定にかかわらず、なお従前の例による。